民間機関における学習支援、ソーシャルスキルの取り組み

～発達障害児へのアプローチについて考える～

企 画 者 ：鈴木　正樹（アットスクール）
司 会 者 ：久郷　　悟（滋賀県総合教育センター）
話題提供者：宮江かほり（アットスクール）
鈴木　正樹（アットスクール）
指定討論者：藤井　茂樹（びわこ学院大学）
下村　雅昭（京都女子大学）

【企画の趣旨】

2012 年文部科学省の調査結果で、全国の公立小中学校の通常学級に発達障害のある児童生徒が 6.5%在籍している可能性があるという。このうち、指導計画を作るなどの対応方法が策定された児童生徒は 11.7%で、特に支援を受けていない児童生徒は 38.6%。個別の指導計画の作成も 10%弱という現状にある。

また「課題を抱えている児童生徒がどのような支援を受けているか」において、「通級による指導」の利用は約 3 万人と急増しているが、実際に通級指導がなされているのは全体のわずか 5%弱となっている。「支援の状況」では、3.1%は過去に何らかの支援がなされていたと答えているが、進級進学につれて支援のリソースが利用しにくくなった可能性もある。

こうした課題のある児童生徒に対しての支援ニーズは学習支援を含めて多様であり、学校や教育センター等、公的機関だけでは応えきれていないのが実情である。こうした背景の中、民間支援機関や団体の必要性が高まっている。

そこで、本シンポジウムでは発達障害児への学習支援やソーシャルスキルを行っている民間機関での実践を報告することで民間支援の理解を図ると共に、民間に求められる役割や連携の在り方、現状の課題について議論を深めたい。

「自立のためのアカデミックとソーシャルスキルの支援」

鈴木　正樹

株式会社アットスクールは、2005 年 6 月に設立し、滋賀県草津市および大阪市を中心に、発達障害や不登校を含む特別な教育的ニーズを持つ幼児から高校生までの支援を行っている。
設立以降これまでの 10 年間で支援に関わった人数は 3,000 人におよび、現在も年間平均 350 名あまりの子供たちが在籍し、支援を行っている。

具体的には、家庭教師や通塾による個別指導、少人数による学習支援やソーシャルスキル・トレーニングを中心に据えながら、仕事体験やもの創り体験など家庭や教室を離れた活動も大切にしている。また保護者や支援者に対しては定期的にセミナーを開催し、発達障害の理解や啓発、環境調整の重要さなどの情報提供を行っている。

アットスクールに在籍している子供たちは「学校の勉強についていけない」「友達関係やコミュニケーションが苦手」「学校や園に行くのを嫌がる」などの主訴を持ち、約 5 割の子供たちは診断を受けており、診断のない場合でも何らかの発達の偏りがあると考えられている。

多くの生徒は小学校の 3 年生から高学年にかけて学校の勉強が難しくなり、友達関係も複雑になったことで、親の気づきや教育機関からの勧めを受けて相談に来るケースが多い。

個別の学習支援による学力補充、ソーシャルスキル・トレーニングによって対人関係やコミュニケーション力を向上させることで不登校やいじめなどの二次障害を未然に防ぎ、子供たちが学校や家庭で有意義な活動ができ、自信回復を図っていけることを願い、生徒にはそれぞれ職員と講師が担当を持ち個別の学習支援計画書(ISSP)を作成し、指導にあたっている。

民間法人として活動をするメリットは、親が学校に相談しにくいケースや長期的に支援を継続できることである。学校では担任との関係や進級、進学によって支援に結びつかなかったり、途切れてしまうことがあるが、民間では保護者の理解協力があれば幼児期から高校卒業、その後の就労まで一貫した支援を行うことができる。

また民間は学校や公的機関よりも「敷居」が低いために保護者も気軽に相談しやすいメリットがあるが、その反面、塾は子供たちが学校のように長い時間を集団で過ごす場所ではない側面もある。

アットスクールは創業以来、「一人ひとりの個性とニーズに合わせた自立支援によって子供たちの確かな学力と豊かな人間性の育成に貢献する」を理念に掲げて活動してきた。保護者からも個別のニーズや発達、特性に応じた学習支援やソーシャルスキル支援が年々求められている。

本シンポジウムでは具体的な事例も示しながら、民間機関としての取り組みを紹介したい。

「民間機関のおけるソーシャルスキル・トレーニングの試み」

宮江　かほり

子どもたちが社会の中で生きていくうえで問題の多くは、人間関係に由来するものであるので、ソーシャルスキルを身につけることによって子どもの自己評価が高まり、生活が豊かになる。逆に、高い知識や技術を有していても、適切な対人関係が築けないと社会生活に支障が出る場合もありうる。ソーシャルスキルは、本来は子どもたちが家族や友達との日常的な関わりの中で自然と身につけていくスキルであるが、現代社会においては家庭や学校、社会の有り方が変化したため、自然な形でソーシャルスキルを身につけることが難しい傾向がある。

近年、通常級に在籍している子どもで、学業における遅れはないが、学級の中でのコミュニケーションがうまくいかずにトラブルになる、不登校になって相談に来られるケースが増えてきた。同年代の子どもとのコミュニケーション、社会性を身につけるためには、大人との個別の授業では限界がある。少人数のグループでコミュニケ―ション力をはじめ、我慢する力、周りに合わせる力、折り合いをつける力を身につけ、社会性を高めるトレーニングができないかといった要望の声を受けて、ソーシャルスキル・トレーニングに特化したクラスを新設した。

ターゲットは小学校 3 年生～中学生で、4～8 人の少人数クラス、1 回 60 分の月 3 回の授業を 1 年（12 ヵ月）1 サイクルとしてカリキュラムを組み、授業を行った。アットスクール草津本校で 3 クラスのベ 19 人、大阪校 2 クラスのベ 11 人が在籍し、カリキュラム・指導案に沿って授業を進めた。

評価方法は QCD（子どもの日常生活チェックリスト）のチェックリストで測定した。QCD は保護者記入で 4 段階評定、発達障害児が感じる困難を軽減し、日常生活をよりよく改善するために一日を通じた社会機能を評価するチェックリストである。

一年間、クラスに通うことで学校や家での様子に変化があったと保護者より報告を受けたり、自信を持って意欲的に取り組めるようになった子どももいた。

本シンポジウムでは、ソーシャルスキル・トレーニングによって子どもが変化した様子を子どもの臨床像およびチェックリストを用いて評価したものを紹介する。

学校でのトラブルや不登校などの問題が顕在化してからソーシャルスキル・トレーニングを開始するケースが多いが、このような問題が顕在化する思春期以前の段階でより基本的なソーシャルスキルを学ぶことも有効である。早期に子どもにソーシャルスキルを習得することで、現実の場面で具体的にどのように対応したらよいのかが理解でき、より社会的適応が良好になる。逆に、ソーシャルスキルが不足することによって現在の適応状態を悪化させるだけでなく、将来的に対人関係での問題を招く契機になることで、子どもの精神的安定を脅かすことにつながりうる。

以上のような観点から、年中～小学校 2 年生を対象にしたソーシャルスキルクラス（キンダークラス）を 2014 年度から開講した。本シンポジウムではそのクラスの取り組みについても紹介する。

キーワード：環境調整，学習支援，ソーシャルスキル